

美しい「理念」を語るより、社会の「安定」を重んじる立場を「保守」と呼ぶのなら、私はその立場を心から支持します。社会が混乱に陥ったとき、最初に犠牲になるのはいつも私たち一般の庶民、なかでも、もつとも立場の弱い人たちだからです。

けれどもその「安定」が、単に見せかけだけのものにすぎないとしたら。

すでに社会の中枢神経がおかしくなっていて、末端で起きている悲劇やその痛みが、ただ感じられなくなっているだけだとしたら。

遠くから、いま私たちの生活を支えているさまざまな防波堤は決壊し、日本という国全体が大きな混乱に陥ってしまうことでしょう。

私が自分の本のなかで繰り返し取り上げてきた沖繩の人たちは、かつてその危険性を、

「小指の痛みを、体全体の痛みとして感じてほしいのです」

という、見事な言葉で表現してくれました。

それはただ、苦境にある自分たちを助けてくれというお願いではありません。

体の一部がこれほどまでに傷ついているのに、その痛みが感じられないとは、いったいどういうことなのか。痛みというセンサーを失った生きものが、どうして安全に生きていくことができるのか。このあと体全体に何が起ころうとしているのか、少しは想像してみたらどうなのだ――。

そういう同胞としての、心からの警告でもあるのです。

沖繩が長い苦難の歴史のなかから紡ぎ出した、そうした輝くような言葉のなかにこそ、これから日本という国が再生していくための貴重な知恵が存在していると私は思っています。

この本は、二〇一〇年六月の鳩山内閣の崩壊と、その九カ月後に起こった福島原発事故をきっかけに始めた、約七年間にわたる「大きな謎を解く旅」の全体像を、できるだけ簡単にまとめたものです。

旅を終えた感想としては、

「日米の軍事的な関係についての闇は、たしかに深かった。しかしそれは、自分たちが

あまりに無知だったから深かっただけで、わかってみると案外単純な話でもあった」というのが正直なところですよ。

本文中では、

「あとは、きちんとした政権をつくってアメリカと交渉するだけだ」と書きましたが、もちろん容易なことではありません。

急いで調べる必要があるのは、他国のケーススタディです。

- 大国と従属関係にあった国が、どうやって不平等条約を解消したのか。
- アメリカの軍事支配を受けていた国が、どうやってそこから脱却したのか。
- 自国の独裁政権を倒した人たちは、そのときどのような戦略を立てていたのか。

これからは、そうした「解決策を探す旅」が始まります。

少し時間はかかるかもしれませんが、何かわかったら、またご報告します。

それまでしばらくのあいだ、みなさん、さようなら。お元気で。